

反復と相対性

——ハーディ『青い眼』の内部構造——

杉 村 泰 教

I

ハーディ (Thomas Hardy) の作品には、「反復」を示唆する描写がしばしば見うけられる。とりわけ『青い眼』(*A Pair of Blue Eyes*) は、この種の描写が目立つ小説である。ナイト (Henry Knight) が「名無しの断崖」(the Cliff without a Name) から足を滑らせて危機に頻した事件は、エルフライド (Elfride Swancourt) がウエスト・エンデルストウ教会 (West Endelstow Church) の胸壁の上で転落寸前となった事実を反復していることはいうまでもないが、この他にジェスウェイ (Felix Jethway) の墓や、エルフライドのイヤリングが繰り返し現れたり、同じ風景が何度となく出現し、なにげない会話の端々に反復の徴候が読みとれる。

ところで、このハーディの初期の作品は、その未熟さの故に、今まであまり高い評価をうけていないといえよう。例えば、リチャード・カーペンター (Richard Carpenter) は、この小説の奇怪きわまる反復描写と、どこちなく緩慢なプロットを指摘する。そして、折角、伝統的な喜劇の形式で書き始められたものが、不幸にもねじれて、喜劇とも悲劇ともいえない皮肉で不満足な結果に終わっているという。¹

しかし、これらの欠点を、単に初期の作品に特有の未熟さとして片付けることはできないのではなかろうか。

先ず、この作品に頻出する奇妙な「反復」の性格に注目する必要がある。

この反復は、ミラー(J. Hillis Miller)のいう「根拠なき重複」(‘ungrounded doublings’)となっているのである。ミラーは、反復の型をプラトンの反復とニーチェ的反復の二つに分ける。プラトンの反復においては、あらゆるものが特定の原型の複製となっているのに対して、ニーチェ的反復は、「根拠なき重複」であり、相異なるものが偶然にも反復するように見える性質をもっている。² 彼は、これら二つの型の反復が小説の中で互いに相容れることなく共存していると考え、³ 彼が注意を向けるのは、この二種の反復の絡み合いである。テキストの意味とは、差異を含んで反復される各要素間の相互作用より生ずる相対的意味に他ならない。⁴

また、ピーター・ブルックス(Peter Brooks)は、この反復と差異が、小説のプロットを形成する二大要因であると主張している。彼によれば、小説の中に複雑なプロットの「模様」(‘arabesque’)を構成するものは、反復の衝動と変化の力との間に生ずる緊張(tension)である。ブルックスは、フロイト(Sigmund Freud)の『快感原則の彼岸』(*Beyond the Pleasure Principle*)の理論に基づき、反復衝動の中に、生から死への短絡を防止する迂路を作り出す働きがあることを強調している。「死の本能」(death instinct)である反復衝動は、それ自体、無気味で悪魔的なものであるが、他方では、「生の本能」(life instinct)の暴発を食い止め、そのエネルギーを保存する役割を果たしている。⁵ 変化や発展を促す「生の本能」は、そのまま放置されるとエネルギーを出し尽くして、たちまち死と短絡してしまう。しかし、反復の機能は、この進路を様々な方向に迂回させ、至る所に生と死の張り合った中間地点を設定する。ここに、彼のいうプロットのアラベスク模様が描かれてゆくのである。⁶ 反復と差異が、テキストの中に相対的な意味の模様を織りこんでゆくという点では、ミラーとブルックスの意見は共通している。

この『青い眼』なる作品における反復描写の中にも、生と死が等しく織

りこまれた模様が展開されている。そして、生と死の二大勢力が等しく張り合った、いわば無風地帯には、あらゆる事象や意味が相拮抗しつつ並置されているのである。そこには、相対的世界が展開しているといえよう。ところが一方、登場人物がこのような世界を体験するのは、自然の風景や、現実を離れた空想、あるいはイメージの領域に限られている。彼らが、現実の世界に復帰した途端、小説内部の緊張が緩み、プロットの模様が歪んで、皮肉な雰囲気呈することになる。そして、その最初の徴候は、すでに、ナイトの遭難場面に現れているのである。この場面の描写は、作品の全体構造をほぼ集約しているといえよう。反復と差異によって生み出されるダイナミックで緊迫したプロットは、この作品の随所に相対的世界を現出させる。しかし、一方において、この世界を支えている様々な力の均衡は、しばしば失われ、その緩みの中から一種異様な雰囲気が醸し出されるのである。これは、創作上の未熟さというよりはむしろ、この作品の独創性ではないだろうか。

以下の考察は、このような視点の下に行われることになる。

II

ナイトの遭難が、胸壁でのエルフライドの事件に重ね合わされていることは、彼女がナイトに語った「既視感」(*déjà vu*)によっても明らかである。

‘You are familiar of course, as everybody is, with those strange sensations we sometimes have, that the moment has been in duplicate, or will be.’ ‘That we have lived through that moment before?’ ‘Or shall again. Well, I felt on the tower that something similar to that scene is again to be common to us both.’⁷

この 'strange sensations' は、ハーディが好んでとりあげるものの一つである。『非常手段』(*Desperate Remedies*)では、シシリア(Cytherea Graye)の枕元に響いてくる水車の軋みに混じって、オールドクリフ嬢(Miss Aldclyffe)の父親の臨終の声が聞こえ、遠い昔、シシリアの母が、死に際に発した声と重なり合っている。⁸『テス』(*Tess of the d'Urbervilles*)においても、彼女の結婚式当日、たまたま借用した四輪馬車と、ダーバヴィル家の祖先が殺人事件を犯した時の公式四輪馬車とが奇妙に重複している。⁹

しかし、このような反復が既視感で表現されていること自体、「根拠なき重複」の表明といえよう。なぜなら、既視感は、その状況や出来事が全く新しいものであるにもかかわらず、見慣れたものにうつる感覚だからである。¹⁰ エルフライドは、胸壁の上を歩くことに一種のスリルを感じており、この日もナイトの気を引くために故意に危険を冒したわけである。ところが、ナイトの方は、風で飛ばされた帽子を拾うため危険な斜面に足を滑らせた。二つの事件の重複には、なんの根拠も見出すことができない。

ジェスウェイの墓は、まずエルフライドがスティーヴン(Stephen Smith)と結婚を約束する場となり、ついでナイトがエルフライドの非を咎める場となる。前者の場合、ジェスウェイの死因が結核であり、エルフライドとの関係も薄かったのであるから、墓は彼女にとってそれほど重要な存在とはなっていない。しかし、ナイトの眼前に出現した時、この墓はエルフライドにとって極めて宿命的な意味を帯びてくる。

エルフライドのイヤリングとウィンディー・ビーク(Windy Beak)の崖の組み合わせも三度繰り返されているが、その一つ一つが、他とは異なるニュアンスをもっている。紛失したイヤリングをスティーヴンに探させる時のエルフライドは、スティーヴンより優位な立場にあるが、ナイトに贈られたものを装着する場面では、逆に彼女の立場が劣勢となっている。紛

失したイヤリングが再び出現する状況はどうであろうか。この時まで、すでにナイトは、エルフライドに恋人がいるのではないかという疑惑を抱いている。それが一挙に噴き出すのがこの場面である。彼がポケットナイフで岩の裂け目から穿り出したイヤリングは、エルフライドとの仲を引き裂く決定的な要因となる。エルフライドとスティーヴンとの関係を、取り返しのつかないほど罪深いものにしてしまう点では、紛失したものの単なる出現で済むものではない。次々に新たな状況を生み出しながら繰り返されるイヤリングとウィンディー・ビークの組み合わせが、エルフライドを次第に窮地へ追いこんでいくのである。この日、彼女がナイトとともにウィンディー・ビークへ出かける時の状況すら、かつてスティーヴンと一緒に同じ場所に赴いた時と全く同様、自分は馬に乗り、相手は傍らを歩く。

‘Yes ; but you can ride.’ ‘And will you too?’ ‘No, I’ll walk.’ A duplicate of her original arrangement with Stephen. Some fatality must be hanging over her head. (p. 331)

ここでも、偶然の‘duplicate’の中に、エルフライドの立場の暗転が表出されている。かつては、スティーヴンとの‘first kiss’と結婚の約束につながった散歩が、今度はナイトを前にして罪悪感と疑惑を生み出すものとなっている。

相異なるものの中に偶然の一致を見出す描写は、この他にも多く見られる。エルフライドとナイトがロンドンからプリマス(Plymouth)への帰途、船上で明け方の空を眺める一節もそうである。

The star dissolved into the day. ‘That’s how I should like to die,’ said Elfride. . . ‘As the lines say,’

Knight replied — .

‘ “To set as sets the morning star, which goes Not down behind the darken’d west, nor hides Obscured among the tempests of the sky, But melts away into the light of heaven.” ’

‘O, other people have thought the same thing, have they? That’s always the case with my originalities — they are original to nobody but myself.’ (p. 319)

密かに自己の文学的独創性を誇りにしていたエルフライドは、すでに同時代の詩人が同じような内容の詩を書いていることを知って、大いに落胆している。反復は、ここにおいてもエルフライドの出端を挫くのである。

III

このような種類の反復のもつ無気味な性質が最も強調されているのが次の一節である。断崖絶壁にかじりついたナイトの眼前に古生代の三葉虫の化石が出現し、一連の心象風景が彼の心をよぎる。ここには、途方もなく長い時間を隔てた反復が描かれている。ナイトは、およそ人間とは無縁なはずの何億年も前の下等動物と、共通の「死に場所」で顔を合わせているのである。

It was a creature with eyes. The eyes, dead and turned to stone, were even now regarding him. It was one of the early crustaceans called Trilobites. Separated by millions of years in their lives, Knight and this underling seemed to have met in their place of death

... The immense lapses of time each formation represented had

known nothing of the dignity of man. They were grand times, but they were mean times too, and mean were their relics. He was to be with the small in his death.

.....

Time closed up like a fan before him. He saw himself at one extremity of the years, face to face with the beginning and all the intermediate centuries *simultaneously*. Fierce men, clothed in the hides of beasts, and carrying, for defence and attack, huge clubs and pointed spears, rose from the rock.... Behind them stood an earlier band. No man was there. Huge elephantine forms, the mastodon, the hippopotamus, the tapir, antelopes of monstrous size, the megatherium, and the myledon — all, for the moment, in *juxtaposition*. Further back, and *overlapped* by these, were perched huge-billed birds and swinish creatures as large as horses. Still more shadowy were the sinister crocodilian outlines — alligators and other uncouth shapes, culminating in the colossal lizard, the iguanodon. Folded behind were dragon forms and clouds of flying reptiles: still underneath were fishy beings of lower development; and so on, till the lifetime scenes of the fossil confronting him were a present and modern condition of things. These images passed before Knight's inner eye in less than half a minute... (Italics mine.) (pp. 240-241).

これは、いわば逆進化の過程の瞬間的パノラマであり、極めて原始的な下等動物が、一個の人間の存在と深いかわりをもっている。

ところで、エリアーデ(Mircea Eliade)は、17世紀以来の進歩の観念が

19世紀の進化論で完全に定着したにもかかわらず、このような直線的歴史観 (historical linearism) の反動として、周期説への関心が20世紀にかけて復興したというが、¹¹ これは「進化」の裏に退化や反復が潜んでいることに言及したものと考えられる。

あらゆる生物の頂点に位する人間が、かくの如き卑小な生き物と同列に伍することの不条理さに、ナイトは意気阻喪するが、その反面、この下等動物への強い親近感もある。¹² 絶体絶命の状況に置かれたナイトが、殊更に自分を三葉虫の化石と関係づけようとするところには、無生物に回帰することによって自己の生命の起源に到達しようとする無意識の衝動が働いている。¹³

フロイトによれば、同一の状況を運命のごとくに繰り返す「反復強迫」(Wiederholungszwang)の衝動は、生命ある有機体に内在するものであって、人間がかつて捨て去った状態へ復帰しようとする衝動、すなわち無生物に還ろうとする死の本能である。¹⁴ しかし、この欲求は、プラトン (Plato) の『饗宴』(Symposium)に見られるように、引き裂かれた小部分を再結合しようとする衝動であるから、死の本能と生の本能は最初から表裏一体となったものであるという。¹⁵

このように、ナイトが体験した無気味な反復の背後には、生と死が等しく織りこまれた模様が存在している。生と死のこのような等価的結合の醸し出す雰囲気は、本作品の随所に窺える。転落寸前のナイトと、救助に駆けつけたエルフライドとの間に、この世のものとも思われない純愛の情が通い合う。死を背景にして愛が激しく燃え上る一方、愛の真只中で、突如、死が顔を覗かせる。ボートを降りた二人が、初秋の夕暮、ベルヴェディア (Belvedere) とよばれる八角形のあずま屋で、今までになく深い間柄になっているところを、偶然スティーヴンが目撃する場面では、あずま屋の横木が二人の上に骸骨のあばら骨のような陰を落とす。

The face of Elfride was more womanly than when she had called herself his, but as clear and healthy as ever. Her plenteous twines of beautiful hair were looking much as usual, with the exception of a slight modification in their arrangement in deference to the changes of fashion. Their two foreheads were colse together, almost touching, and both were looking down. Elfride was holding her watch, Knight was holding the light with one hand, his left arm being round her waist. Part of the scene reached Stephen's eyes through the horizontal bars of woodwork, *which crossed their forms like the ribs of a skeleton*. Knight's arm stole still further round the waist of Elfride. (Italics mine.) (p. 268)

そして、この二人の行動は、ジェスウェイの母親(Mrs Jethway)によって一部始終観察されているのである。息子の病死の責任をどこまでもエルフライドに負わせようとするジェスウェイ夫人は、まるで魔女のようにエルフライドに纏わりつき、彼女の恋愛に呪いをかける。

生を描きながら死を暗示し、逆に、死へ至る過程を示しつつ、その裏で真実の生を強調する手法は、エルフライドの柩を積んだ列車に偶然乗り合わせたナイトとスティーヴンが、それとは知らず、彼女を奪いあって激しい口論を続ける有名な場面にも見い出される。たまたまその日は聖ヴァレンティン・ディの前夜に当たり、二人の脳裏には、エルフライドの生き生きとした姿が鮮やかに浮かび上っていると思われる。生と死が互いに反転しあうような関係で結びついている例は、ハーディの他の作品にも多く見られる。例えば、『帰郷』(*The Return of the Native*)では、ヨーブライト夫人(Mrs. Yeobright)が、今にも干上りそうな水溜りで各々の生を満喫している小動物の姿を見つめ、¹⁶ また『非常手段』の結末では、黒布で

覆ったマンストン (Manston) の柩が運ばれてくるのを見たスプリングローブ (old Farmer Springrove) が、死は人間が生まれると同時に住みつくものであることを感慨深げにベイカー (Baker) に語っている (p. 400)。この意味で、われわれ人類と下等動物との間には、いかなる上下関係もない。

ここで、先に引用した断崖の場面に用いられている ‘simultaneous’, ‘juxtaposition’, ‘overlap’ などの語に注目したい。ここでは、何億年という膨大な時間が、わずか数十秒に凝縮され、下等動物から高等動物までが殆ど同じレベルに置かれて出現する。生と死の勢力が伯仲すると、その中間地帯に構築されているあらゆる価値の序列が崩れて互いに張り合い、様々な模様を描き出すのである。ナイトがしがみついている断崖絶壁に降りかかる雨すら、全く新たな理法に従っているかのようだ。

An entirely new order of things could be observed in this introduction of rain upon the scene. It rained upwards instead of down. (p. 241)

さらに象徴的なのは、ナイトが絶壁に投じた一片の頁岩が、海から吹き上げる風の力と拮抗して見事な光景を繰り広げることである。石は落下するどころか、逆に鳥のように上昇し、もとの位置より少しずれた所に舞い戻る。

Knight threw a scrap of shale over the bank, aiming it as if to go onward over the cliff. Reaching the verge, it towered into the air like a bird, turned back, and alighted to the ground behind them. (p. 233)

このように様々な力が張り合って作り出す印象的な風景は、特に光を中心とする自然描写に多く見られる。太陽と月が競合して映し出すエルフライドとナイトの限りなく淡い影法師、絵の具の色の配合を使い尽くして描き出したような秋の紅葉、夕焼けの真紅と東の空の濃青色の対比、ナイトが引用した詩の一節にある太陽と明けの明星の光の効果、ステンドグラスの虹色の光が敷石の上に投げかける透明に近い色合いなどは、その好例であろう。この他にも、地下納骨堂の暗闇の中で、外からかすかに差しこむ白い光が、壁のローソクの黄色い光との対照によって青い色調を呈したり、同じ紫色の光のうちで、「愛」をあらわす明るいものと、「死」をあらわす暗いものが対比されていたりする。

このように、諸々の要素が、相対的に力を及ぼし合っている風景は、現実の世界からある程度距離を隔てたところで真価を発揮するようだ。例えば、絶壁にかじりついて必死に救助を待ち望むナイトも、心象が頭に浮かんでいる三十秒足らずの間は、不思議と、自己の生に執着しないでいられるのである。イメージの世界で相対性の効果が発揮されているもう一つの例は、ナイトの心の中でエルフライドの様々なイメージが均衡を保っていることである。この中からいずれか一つを抜き出してノートに書き留めた瞬間、それは、にわかに現実の事がらとなって、以前のイメージの均衡が破れ、彼女の本来の姿が消えうせてしまう。

‘An innocent *vanity* is of course the origin of these displays. “Look at me,” say these youthful beginners in *womanly artifice*, without reflecting whether or not it be to their advantage to show so very much of themselves. (Amplify and correct for paper on Artless Art.)’ ‘Yes, I remember now,’ said Knight. ‘The notes were certainly suggested by your manoeuvre on the church tower.’

But you must not think too much of such random observations,' he continued encouragingly, as he noticed her injured looks. . . 'A mere fancy passing through my head assumes a factitious importance to you, because it has been made permanent by being written down. All mankind think thoughts as bad as those of people they most love on earth, but such thoughts never getting embodied on paper, it becomes assumed that they never existed. I daresay that you yourself have thought some disagreeable thing or other of me, which would seem just as bad as this if written. . . .' (Italics mine.) (p. 203)

今、仮にこの「虚栄」('vanity'), 「女らしい術策」('womanly artifice')に着目するとすれば、これと対照的なイメージが、エルフライドと別れた後のナイトの臉に鮮やかに甦る。

Knight blessed Elfride for her sweetness, and forgot her fault. He pictured with a vivid fancy those fair summer scenes with her. He again saw her as at their first meeting, timid at speaking, yet in her eagerness to be explanatory borne forward almost against her will. How she would wait for him in green places, *without showing any of the ordinary womanly affectations* of indifference! How proud she was to be seen walking with him, bearing legibly in her eyes the thought that he was the greatest genius in the world! (Italics mine.) (pp. 385-386)

われわれの抱くイメージは、断続的に生成し消滅する。それらは互いに

独立し、孤立している。ある対象を表象するということは、この孤立したものの間になんらかの関係を確立することである。¹⁷ エルフライドの実相は、これら諸々の拮抗しあうイメージの相互関係の中にあると考えられる。しかし、ひとたび現実の世界に立ち戻った時はどうであろうか。例えば、心象風景が消え去るや否や、断崖絶壁のナイトは、直ちに救助のことを考える。そして、それまでの心象をすべて打ち消すかのように ‘... his death would be a deliberate loss to earth of good material; ... such an experiment in killing might have been practised upon some less developed life.’ と、ひらき直り、自分の知性を「人並み以上」(‘above the average’) と考えている (p. 243)。ここには再び価値の序列化が復活している。この一節は、今後のエルフライドとの関係に一つの伏線を提供するものである。エルフライドとの交際の中で明るみに出てきた彼女の過去の事実が再度、ナイトの頭に「悪しき考え」(‘bad thoughts’) をもたらし、彼の手帳に書き留められて永久化されてしまった記録の如く、いつまでもその痕跡をとどめる。これが払拭されるのは、ナイトがエルフライドと別れて一年余りが経過した後の追憶の世界でのことにすぎない。

ナイトは、心に浮かんだことを現実に文字で書き留めた瞬間、イメージの緊張関係が崩れて、ものの本来の姿を伝えることができないと語るが、この一節の少し後で、今度はエルフライドが、話しことばに関して計らずも同じような危機感を表明している。

‘Well, you know what I mean, even though my words are badly selected and commonplace,’ she said impatiently. ‘Because I utter commonplace words, you must not suppose I think only commonplace thoughts. My poor stock of words are like a limited number of rough moulds I have to cast all my materials in, good and bad ;

and the novelty or delicacy of the substance is often lost in *the coarse triteness of the form.*' (Italics mine.) (p. 212)

ナイトが「悪しき考え」を払拭できないのと同様、エルフライドも、彼女が恐れていたとおり、「使い古された粗野な形」('the coarse triteness of the form')の中に、自分の人生の「斬新さ」('novelty')と「持ち味」('delicacy')を失ってしまうのだ。ナイトに捨てられた後、彼女は、「あだな命を、なにか実用的な利益にむけるために」('so as to turn my useless life to some practical account' [p. 400]) 祖母の出た名門ラクシリアン家の現在の当主、ラクシリアン卿 (Lord Luxellian) の奥方となる。その上、彼女がスティーヴンとロンドンへ駈落した事件や、ラクシリアン卿との結婚後、流産で死亡する事実も、結局のところ祖先の生き方を、ごく大雑把に反復したものとなっている。

このようにして、彼女の独創的な人生は、否応なしに粗野な鋳型にはめ込まれてゆくのである。ここでは、反復のみが強調されて、その間の差異が無視されている。エルフライドの死が、祖先の行動形態の模倣などによって説明のつくはずのものでないことは、一人一人の結婚から死に至る過程を辿れば分かる。¹⁸

IV

再びナイトの遭難現場に戻ろう。つぎの一節には、断崖にかじりついたナイトが、自然の女神の不公平さを嘆く場面が描かれている。

However, Knight still clung to the cliff. To those musing weather-beaten West-country folk who pass the greater part of their days and nights out of doors, *Nature seems to have moods in*

other than a poetical sense: predilections for certain deeds at certain times, without any apparent law to govern or season to account for them. She is read as a person with a curious temper; as one who does not scatter kindnesses and cruelties alternately, impartially, and in order, but heartless severities or overwhelming generousities in lawless caprice. Man's case is always that of the prodigal's favourite or the miser's pensioner. In her unfriendly moments there seems a feline fun in her tricks, begotten by a foretaste of her pleasure in swallowing the victim. (Italics mine.)
(p. 241)

しかし、この理不尽で気紛れな女神の支配する世界こそ、この作品にふさわしいといえよう。すでに述べたように、この小説に現れる反復描写は、進化論的歴史観の反動と考えられるが、これは古代ギリシャ以来、詩人たちが時間の本質とみなしてきた固定的永遠回帰、すなわち死と再生を単純に繰り返す円環状の static な反復とは異なるものである。このような永遠回帰は、近代の進化論や宇宙論における生成、消滅のダイナミズムにとって代わられている。¹⁹ だが古代の原型はまったく姿を消してしまったのではなく、現実の世界と浸透しあって新たな体系を生み出しているのである。²⁰ この意味で、例えばエリッヒ・ノイマン (Erich Neumann) の提案した「大いなる母」(Great Mother) の原型などは、この新しい世界をある程度説明しうるものの一つと考えられる。この原型は、いくつかの種類の女神と魔女が対極に配置されているが、'kindnesses' と 'cruelties' を交互に散布するような規則性はもたない。女神は魔女に、魔女は女神に、いつ何時、覇権を譲り渡すかもしれない。女神の極と魔女の極は、それぞれ自我や意識に強い支配力を及ぼしている。²¹ その結果、両極は、その極点において交

わったり相互に入れ替わったりする。この反転現象は両極で起こりうるもので、極点は終点のみならず同時に転回点でもある。危機を通して救済へ、死や消滅を経て新たな生へ至るかと思えば、逆に生の真っ只中で自我を衰退させる。²²

ナイトが、終に死の谷へ吞込まれる覚悟を決め、邪悪な女神の手に身を委ねようとした瞬間、姿を現わしたエルフライドに彼は真の女神を見る。そして彼女も、このナイトのためには十回死んでもよいと思う (p. 244)。このように、死の淵に臨んで男女の仲がこの上もなく深まったり、逆に愛の高まりの中で突然、死が陰を落とし、魔女のようなジェスウェイ夫人が出現するといった描き方には、このダイナミックな原型の作用を認めざるをえない。

かかる男女の愛のパラドックスに関しては、ハーディ自ら「愛は近接において生き、接触によって死ぬ」(‘Love lives on propinquity, but dies of contact.’)²³ と述懐しており、ミラーは、これをとりあげてノイマンの説に似通った意見を述べている。ミラーによれば、自我は多くの異なった要素が窮屈に同居している場所であり、各々の自我が支配権を主張して、しのぎを削っている。²⁴ ノイマンの「大いなる母」の原型の場合は、無意識の領域にある、相異なった要素が自我を支配しようと互いに張り合っている。それ故、いずれの説においても、一つの要素が覇権を握るや否や、対立する要素がそれにとって代わろうとするのである。²⁵

ナイトの遭難は、我々の心に、これら諸々の力が張り合った姿を彷彿と浮かび上らせる。しかし、次に続くメロドラマ風の救助の場面は、その通俗的な描写のために、それまでの張りつめていた雰囲気をつましくするような印象を与える。足場を悉く失い、辛うじて一叢の岩生植物にしがみついているナイトを、エルフライドは、自分の ‘linen’ で作ったロープによって救出する (pp. 246-247)。生と死のサスペンスの中に不意に出現した

‘linen’ は、二人の間に織り上げられた愛の複雑な模様をとり払い、両者の関係を短絡させてしまう要素をもっている。

しかるに、このアンティクライマックスは、単に創作上の未熟さによるものではない。そこには、ある種の効果が働いているように思われる。ハーディが、登場人物の心理の詳細な叙述をことさらに避けて、読者にその図柄を想像させる傾向のあることは、ローズマリー・サムナー (Rosemary Sumner) によって指摘されている。²⁶ つまり、作者は、ナイトの遭難で最高に盛り上った緊張感を背景に繰り広げられる愛と死の相対的世界を、故意に打ち消すことによって、却って読者の頭にその鮮明な姿を印象づけている。それと同時に、このような相対的世界が、現実発展する男女関係の中で次第に見失われ、忘れ去られてゆく事実をも暗示しているわけである。²⁷ エルフライドを巡って展開する恋愛事件のプロットは、極めて外面的な要素によって進展してゆく。スティーヴンとナイトの心を捉えたのは、何よりも先ずエルフライドの青い瞳の魅力であった。そして、イヤリングの一件が、さらに事件を紛糾させることになる。最後に、彼女がラクシリアン卿の求婚に同意したのも、彼の提供した高価な宝石が一役買っているようだ。

一方、このような華やかな動因の背後には、いつも無気味な反復が陰を潜め、安易に流れようとするプロットを、その都度引き締めている。しかし、この緊張は、物語の進展につれて、次第に失われてゆくのである。

ラクシリアン卿との結婚によって急展開したプロットは、そのままエルフライドの死亡へと短絡してしまう。反復衝動は、もはや変化、発展のエネルギーとの相互関係を失い、無気味で粗野なパターンがエルフライドを永遠に呪縛する。小説の内部で拮抗し合っていた諸要素は、いつもこのような形で相互の均衡を失い、遊離、拡散して元の地平に引き戻されるのである。この相対的力関係の緩みから生ずるアイロニカルで索漠とした雰囲気

が、『青い眼』の独創性の一つとなっているように思われる。

注

¹ Richard Carpenter, *Thomas Hardy* (Boston: Twayne, 1964), pp. 53-54.

² J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels* (Oxford: Basil Blackwell, 1982), pp. 5-9.

³ Miller, pp. 16-17.

⁴ Miller, p. 128.

⁵ Peter Brooks, *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative* (Oxford: Clarendon, 1984), pp. 101-102.

⁶ Brooks, pp. 107-108.

⁷ Thomas Hardy, *A Pair of Blue Eyes* (London: Macmillan, 1975), p. 193. 以下、『青い眼』のテキストは、この版により、引用文及び言及のあとに()を付してページを示す。

⁸ Hardy, *Desperate Remedies* (London: Macmillan, 1975), pp. 120-121. 以下、『非常手段』のテキストは、この版により、引用文及び言及のあとに()を付してページを示す。

⁹ Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (Harmondsworth: Penguin, 1981), p. 280.

¹⁰ Peter Hartocollis, *Time and Timelessness: The Varieties of Temporal Experience* (New York: International University Press, Inc., 1983), p. 86.

¹¹ Mircea Eliade, *The Myth of the Eternal Return or, Cosmos and History*, trans. Willard R. Trask (Princeton: Princeton University Press, 1974), pp. 145-146. なお、要約にあたっては、エリアーデ『永遠回帰の神話—祖型と反復—』、堀一郎訳（未来社、1983）を参考にした。

¹² Gillian Beer, *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction* (London: Routledge & Kegan Paul, 1983), p. 253.

¹³ R.M. Rehder もほぼ同じ内容のことを述べている。R.M. Rehder, "The Form of Hardy's Novels" in *Thomas Hardy: After Fifty Years*, ed. Lance St. John Butler (London and Basingstoke: Macmillan, 1978), p. 18: "On the verge of falling to his death on the rocks below, he imagines life developing from the rock into man. It is as if he is trying to be born again."

¹⁴ Sigmund Freud, *Beyond the Pleasure Principle*, trans. James Strachey (New York: Norton, 1975), pp. 30-33. なお、邦訳として、フロイト『自我論』、井村恒郎訳（日本教文社、1983）を参考にした。

¹⁵ Freud, pp. 51-52.

¹⁶ Hardy, *The Return of the Native* (Harmondsworth: Penguin, 1978), p. 338.

¹⁷ Jean-Paul Sartre, *L'imaginaire: Psychologie Phénoménologique de L'imagination* (Paris: Gallimard, 1985), pp. 259-260 参照。邦訳として、サルトル『想像力の問題—想像力の現象学的心理学—』、平井啓之訳（人文書院、1983）を参考にした。

¹⁸ エルフライドの祖母 Lady Elfride は、歌手と駈落して結婚し、幸福な生活を送るが、初産で死亡し、一児を残す。この子供（エルフライドの母親）は、美しい娘となって副牧師（Parson Swancourt）と駈落し、結婚した後、エルフライドを残して死去して

いる。エルフライドもスティーヴンと密かにロンドンへ出て、結婚の承認をとりつけようとするが、結婚相手は、最終的にはラクシリアン卿であり、この結婚から死に至る過程も、彼女の死因が祖母の場合に似通っているとはいえ、その事情はかなり異なる。祖母の場合は幸せな結婚生活があったが、エルフライドの結婚は、ナイトに捨てられた後の、半ば自暴自棄的な気分の中で同意されたものである。

¹⁹ Robert S. Brumbaugh, *Unreality and Time* (Albany, New York: State University of New York Press, 1984), p. 134 参照。A.O.J. Cockshut, "Hardy's Philosophy" in *The Genius of Thomas Hardy*, ed. Margaret Drabble (London: George Weidenfeld and Nicolson, 1976), pp. 145-146 もあわせて参照。

²⁰ このことに関しては、Wolfgang Iser, *The Act of Reading: A Theory of Aesthetic Response* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1980), pp. 81-82 参照。

²¹ Erich Neumann, *The Great Mother: An Analysis of the Archetype*, trans. Ralph Manheim (Princeton: Princeton University Press, 1974), p. 75.

²² Neumann, pp. 75-76.

²³ Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy 1840-1928* (London: Macmillan, 1982), p. 220.

²⁴ J. Hillis Miller, "Thomas Hardy, Jacques Derrida, and the 'Dislocation of Souls'" in *Taking Chances: Derrida, Psychoanalysis, and Literature*, ed. Joseph H. Smith and William Kerrigan (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1984), p. 143.

²⁵ 西エンデルストウ教会のステンドグラスにも、聖者や天使たちが、原始的な風景の中で互いに優劣を競い合っている図柄が配されている。(p. 339)

²⁶ このことに関しては、Rosemary Sumner, *Thomas Hardy: Psychological Novelist* (London and Basingstoke: Macmillan, 1981), pp. 127-128 参照。

²⁷ イーザーによれば、否定された古い意味は、新たな意味がその上に重ね合わされることによって、読者の意識に蘇る。それと同時に、未だ定まらない、この新たな意味も、古い意味が否定によって解釈の素材となったために、明確な形を成してくるのである。Iser, p. 217 参照。

付記一本稿は、昭和 60 年 10 月 12 日、日本ハーディ協会第 28 回大会において「運命と反復—『青い眼』の相対的世界—」という表題のもとに行なった口頭発表に加筆修正したものである。

Repetition and Relativity :
The Inner Structure of *A Pair of Blue Eyes*

Yasunori SUGIMURA

In Thomas Hardy's works, particularly in *A Pair of Blue Eyes*, there are many descriptions that suggest 'repetition.' Falling from a height, Jethway's tomb, Elfride's earring, as well as other scenes, symbols, and situations are gratuitously repeated. The true character of this 'ungrounded repetition' is shown in the accident involving Henry Knight at the cliff. Here he meets with a fossilized lower animal at the place of death. He is going to repeat the situation that occurred millions of years ago. But we can feel his unconscious drive of reaching the origin of life by returning to inanimate things as he deliberately relates himself to the fossil in his woeful predicament. Thus, behind the uncanny 'repetition' spreads the pattern into which life and death are equally woven. Not only life and death, but many other intermediate phenomena are evenly juxtaposed. Readers can discover the relativity of antagonistic forces throughout this novel. This pattern seems to be found in situations that are removed or distant from the actual world. Especially in natural and mental landscapes, various forces vie with each other to produce an impressive spectacle.

On the other hand, the tension of vying forces is often relaxed when characters are involved in the rapidly developing plot. This development is usually caused by the exterior motives, such as earrings, jewels, and 'a pair of blue eyes.' Once the plot loses its inner equilibrium, it connects life with death too hastily, out of which the ironical and dreary atmosphere is to be generated. This is not so much the product of author's inexperience as the uniqueness inherent in this novel.